片貝新聞

発行所
片貝新聞社
〒947-01
小千谷市片貝町10367-4
TEL・FAX 0258-84-3246
編集発行人　吉原芳郎
題字　黒崎敬滌氏

JA片貝町
シンボルマーク
天の恵み地の恵み

水沢の荒地を緑豊かな地に！

これはユニーク グリーンパーク水沢の30名

″自然は心を育てる″を実感

かけがえのないふるさと片貝を、豊かな自然に包まれたまま現存させたい――そんな願いからユニークな活動をしているグループがある。その名もグリーンパーク水沢（みっそう）。一昨年から活動を始め、荒地を整備したり、ミズバショウを植えたりしており、今秋にはブナの木を二百本程植樹することにしている。

グリーンパーク水沢（＝GPM）の一行が、緑豊かな地に″改造″している場所は、五之町クラブから400～500m山側に入った沢で、その場所の通称名が「水沢」で、地元民は「みっそう」と呼ぶ。この荒地約一町歩をミズバショウ、ショウブ、ブナなどで緑豊かな場所にしようという遠大な計画だ。

ことの始まりは五之町のキャメルに集まった山好きのお客さん達と、主人の安達泰三さん（68）のやりとりがきっかけだった。ミズバショウを植えて町民の散歩道を作りたい――この発想からのスタートだった。

トントン拍子に話しは進み、荒地となっている水沢を″開拓″することに。地主六名に話しをすると、皆快く土地を使ってよいとの返事で、本格的に作業を開始。

最初は草刈り、U字溝を埋めての整備、使われていない養鯉池の整備等々だった。そして昨年ミズバショウの苗を一株植えたところ、今年の春には四株にも増え、近い将来には群生地になる可能性が大きくなった。

ミズバショウを群生させるためと、山を守ることなどを目的に今年十月末から十一月にかけてブナを200本植樹することにしている。

類は友を呼ぶ。話しは徐々に広がりメンバーが増えてきた。かねてから緑に関心があった協議会長の吉井陽さんも個人として会員になった。野鳥愛好家の山村英人さん（屋敷）は、早くからのメンバーの一人であるが、カワセミの巣があることから、活動日の他にも足しげく通って撮影を楽しんでいる。

さらに、山村さんと熱気球で知り合った東京のプロのカメラマンも、山村さんからこのGPMの活動を聞き、是非仲間に、と昨年秋正式会員となった。草刈り等の活動日にはわざわざ東京からかけつけ汗を流し、その後恒例の自然の中で、一杯やりながらの懇親会を楽しみ、いたく感動して帰っていったとのこと。

今や会員は三十名にまでなっており、会長には高橋和夫さん（新屋敷）が就任、発案者の安達泰三さんは名誉会長を務めている。

植物に詳しい人、野鳥愛好家、プロカメラマンを初めそれぞれがそれなりの専門的知識を持っているだけに、話題が豊富で和気アイアイ。活動した後の自然の中での飲み会が、会員等の絆を更に強める。

企業や行政のヒモつきにならず、あくまでも自分達の手作りをモットーにしており、年会費は二千円。将来はミズバショウの群生地、ブナ林、ツツジ、ショウブを植え、カワニナが住んでいるのでホタルの群生地に、そして沢ガニ、野鳥が集まるそんな水沢作りを夢みており、着々と現実化しつつある。

中心的存在となっている安達名誉会長は、実は数年前、肺ガンの手術を行なったというが「次から次へと勉強することが出てきて、楽しくて死ぬことを忘れてる。皆なで金出して損して、労力を出して難儀して……それがこんなに楽しい。まさに自然は心を育てる、を実感してます」と笑顔で取材に応じていた。

◀現地・水沢での一行

主張

市は佐藤家跡地を早く購入せよ

このところ佐藤家跡地問題について、片貝組や小千谷新聞など俄然関係者の関心を集めている。

佐藤家は片貝唯一の古い文献である「やせかまど」にも記載され、天明の飢饉における秋山郷への善行は時代が下った今日でも子孫によって感謝されるなど、人に感謝する心の薄れた今日これこそ生きた教訓であり歴史的価値とはこういうものを指すのであろう。紙面の都合でその詳細については控えるが、今回この問題の姿勢について触れてみたい。

この話が持ちあがって数年を経るのに、まだその結論を見いだせないのは怠慢といわれても仕方あるまい。

当初この話がでたときただ歴史的に古いから残せという理論でなく、今後の使い途を決めて当局に訴えるべきだという指摘も一部にあった。

しかし市内にあった古文書や文化遺産についてその一つ一つの使い途について論じていたのでは徒に時間を空費するだけで、結論がでたときは既に遅くもう何も残ってないのがおちである。まして佐藤家の跡地についてはバブルの崩壊という願ってもない幸運によって幸いしたものの、もしかしたら片貝の歴史など煙火を除いて跡形もなく消え去っていたであろう。その煙火とてたかだか百数十年の歴史で、世間的に注目されてから僅かここ二十年足らずで、とても佐藤家三百年の歴史には及ばない。

こうした歴史的に貴重な文化遺産であっても、片貝の活性化にはなり得ないという人もいる。確かにそれも一理で、建物一つ残ったからといって街が活性化するとは限らない。

要はそれをどう使って活性化させるのかは、取り組む人達の努力と熱意によるだろう。いかなる企業といえども何の行動も起こさず仕事が飛び込んでくることはない。あらゆる努力をしてはじめて事業に結びつく。

行政においてもこの原理は変らない。特殊なことをして問題になるからといって押しなべて他町村と右倣えでは、首長など誰がやっても同じで何らの進歩もない。小千谷には小千谷の特色があって当然で、本来地方自治とはそうしたものかも知れない。佐藤家の問題にしても、一部に反対があるからといって、物事を先送りする姿はあまりにも消極的過ぎないか。かつて関東大震災の後、多くの反対を押し退け現在の昭和通りを切り開いた後藤新平の例を引き合いに出すまでもなく、政治とは本来そうあるべきで、賛成者が多いからというのは、子供にも出来ることである。

また、佐藤家に寄付してもらえばという。そんなこと当事者以外皆んな考えてることで、そう出来ない諸々の事情ゆえにこの問題が存在する。こんな願望論をいっても駄目で、要は町民の多くが片貝出身者も含め佐藤家をどう守っていくかという、郷土を思う熱意と行動が問われているので活性化とはこうしたことを指すのかも知れない。

東京片貝会盛況

今年も小中に図書券贈る

東京片貝会（阿部修次会長）は、新役員体制になってから初めての総会を去る六月二十五日東京都中央区日本橋の東京シティエアターミナルで開催した。

片貝町からは吉井陽・片貝町協議会長、小中学校の両校長等六名が駆けつけ、総勢五十名の出席であった。

平成六年度の事業及び決算報告を承認、七年度の予算及び事業計画を話し合った。

吉井協議会長から片貝中学校の体育館が出来上り、これで校舎・体育館共に新しくなり、ますます教育環境が整ったことを初め片貝町の様子が報告された。

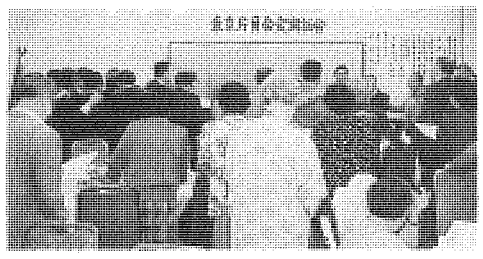
吉原正幸市議からは、先の統一地方選挙の市議選において、片貝町から立候補した関広一、小林光紀、安達稔の三氏と自分、合計四人全員が再選を挙げたことを報告、大きな拍手を受けた。

東京片貝会の傘下にある「母校を励ます会」は、このほど会長が佐藤祐一氏（片貝中八回卒）から新しく藤塚悟氏（同十二回卒）にバトンタッチした。母校を励ます会は、ふるさとの後輩が健やかに伸びゆくことを願い、毎年片貝小中両校に図書購入費を寄贈しているが、今年も藤塚・新会長から出席の井口・小学校々長と酒井・中学校々長それぞれに十万円分の図書券が手渡された。井口校長、酒井校長は「有効利用させていただきます」と感謝を述べていた。

なお、JA片貝町は恒例により、ふるさとの魚沼産コシヒカリを持参、堀井一位第一理事が全員に一kgずつプレゼントして喜ばれた。

総会に引き続き懇親会では、全員で木遣りを大合唱ふるさとの話しに花を咲かせながら盛り上った。

（写真は会場風景）



かたかい春秋

昨年のカラ梅雨から一転、今年は長梅雨で集中豪雨のおまけまでつき、市内でも国道二九一号線が陥没して通行不可能になるなど、かなり大きな被害が出たようであるが、片貝は特に大きな被害はなかったようで何よりである。▼梅雨があければいよいよ片貝まつりの本格的準備に拍車がかかる。年々注目度が高まり、祭りに訪れる人出が増え、様々な問題を抱えるようになった。加えて今年は土、日曜日に重なったのであるから、その混雑ぶりは過去最高のものとなると予想される。▼本気で解決策にのり出そうというのであれば、早く腰を上げねば間に合わなくなってしまう。最大の悩みは駐車場不足とそれに伴う交通渋滞であろう。数年前から各方面であれこれ解決策が提案されているが、抜本的なものはひとつとして無いと言っていいのではないか。▼まずは現状を素直に分析してみよう。現在最大の無料駐車場は小学校グラウンドと中学校の元のグラウンドであるが、十日は早朝からほぼ満杯となる。何故か？答えは簡単。町民が自分の車を停めてしまうからである。来客があったり、知人に駐車場を提供するために、自分の車をあらかじめ″避難″させてしまうのだ。▼町民や関係者以外の車はシャットアウト云々の実現も困難であろう。主要地方道であるから、警察のよほど強力な指導がない限りドライバーが言うことを聞かないからだ。片貝バイパスの開通がない限り、警察も全面通行止めに動かないのでは。何やら悲観的になってきたが、町民の知恵を出し合って早く動こうではないか。

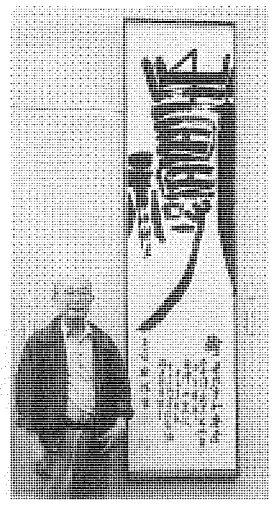
黒崎氏と瑞雲書道展

片貝出身で東京在住の書家、黒崎敬五郎（敬滌）氏が所属する、第30回瑞雲書道展が七月一日から六日まで東京都美術館で開かれ、期間中大勢の観客で賑い好評を博した。

尚、黒崎氏は審査員の一人として審査にあたるなど、会運営にも活躍された。

また、小紙題字も黒崎氏の厚意によるもの。

（写真は展覧会々場での黒崎氏と出品作品）



集めま～す

8月6日午前9時～ リサイクルかたかい

資源の再利用とゴミ減量化を目的に、月一回定期活動を行なっている「リサイクルかたかい」は、八月の活動を六日午前九時から九時半まで、片貝支所前で開催する。回収するのは新聞紙、雑誌、ダンボール、空缶（スチール、アルミ）、発泡スチロール、布等。夏休み期間中でもあるため「小学生の皆さんも一緒に汗を流し、資源の大切さを実践から学びませんか」と呼びかけている。

リサイクルかたかいは、回収して得た利益で毎年小中学校へプレゼントを行なっている。今春は小学校へは一輪車、中学校にはベンチを贈った。

盆踊り近づく

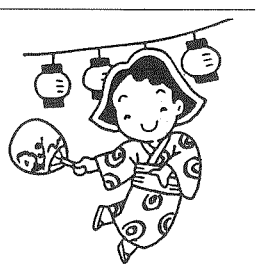
・15日チーム対抗コンテスト
・16日町民仮装大会

間もなくお盆がやってくるが、今年も八月十五、十六の両日浅原神社で盆踊り大会が繰り広げられる。

十五日は「チーム対抗盆踊りコンテスト」で一チーム十五名以上、審査は午後八時から九時半。

十六日は「片貝町々民仮装大会」が行なわれる。こちらは年齢、性別、個人、団体不問で楽しい企画を期待。審査は午後九時から。

なお詳細は片貝公民館（八四―二〇二六）へ。



芸能まつりに400名の町民が

第十二回片貝芸能まつり（片貝公民館、片貝芸能まつり実行委員会主催、片貝町協議会後援）が、去る六月二十五日午後六時半から片貝小学校南運動場で開催された。

黒崎力男片貝公民館長の挨拶で幕開け、ヤヨイ大学民謡部、片貝ことぶき会、片貝伝統芸能保存会、めぐ美会、三友会、池津民謡保存会、みすじ会、片貝花火太鼓の会、片貝民謡の会、むら木会、片貝民謡の会の十一団体が日頃の練習の成果を熱演、四百名近い町民が大きな拍手を贈っていた。

耐久12時間野球&ソフト

祝 片貝町野球連盟30周年

炎天下、会場はおまつりムード

片貝町野球連盟（太刀川忠雄会長）は、創設三十周年を記念して、7月23日片貝スポーツ広場で「十二時間耐久野球&ソフトボール大会」というユニークな行事を展開した。

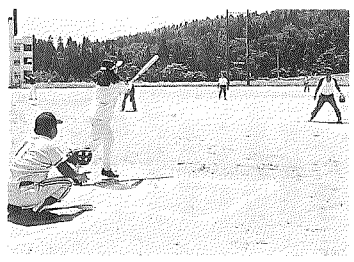
前日までの雨模様とはうって変わり、今夏一番の猛暑日となり、文字通り〝耐久〟の大会となった。始球式ではそのボールを、パラグライダーが空から届けるというアイディア企画。開会式前には花火太鼓がアトラクションとして出演、プレイボール合図は〝花火の片貝〟らしくやはり花火で行なった。

野球連盟オールスターの東西対抗、小学生の部、町民参加ソフトボール、中学生の部、最後は再び野球連盟オールスター戦でしめくくった。全て東西対抗で総勢二百数十名が参加、十二時間ブッ続けのマラソン野球大会に、入れ替わり立ち替わり町民も応援に駆けつけていた。

会場脇ではテントが張られ焼そば、焼とり、カキ氷なども販売、おまつりムードに包まれた。

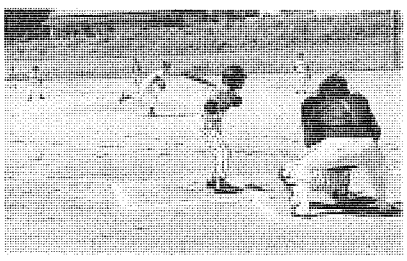
東西対抗の五試合全てのトータル得点は47対47で引き分けとなった。得点当てクイズは農協・黒崎良さんがあてた。

会場には募金箱も設置、片貝中野球部にボール2ダースと五千円を寄付した。一万六千円余りは市の国際交流・文化・スポーツ基金に寄贈した。

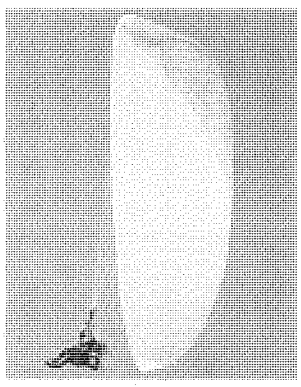


◀町民ソフトボール

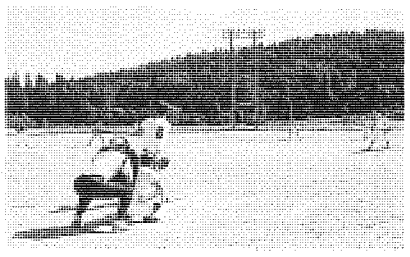
▶元気に選手宣誓



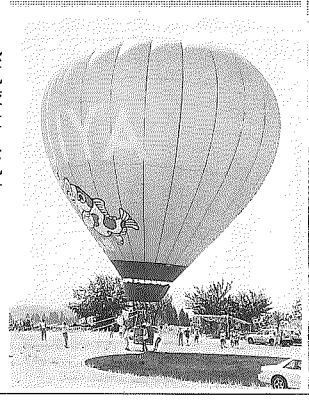
◀小学生でも本格的



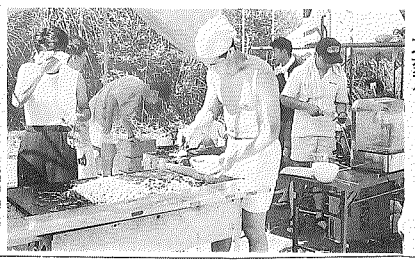
▶パラグライダー活躍



◀打った～大きい



▶熱気球は人気者



◀フー暑い〝露天商〟も大変ダ

ガンバレ！安部勇樹君

相撲でめきめき頭角、向うところ敵なし

安部勇樹君（片貝小5年、町裏）のチビッ子相撲での活躍が目覚しい。

第四回わんぱく相撲県大会兼第十一回わんぱく相撲全国大会予選で、団体戦の小千谷チーム優勝の原動力となり、個人戦でも五年生の部で優勝、二年連続で国技館で七月三十日開催の全国大会に駒を進めた。また、七月九日十日町市で開催の県小中学生相撲選手権大会でも五年生の部で個人優勝、団体戦では準優勝。県内では向うところ敵なし、といった強さを誇っている。

勇樹君が相撲にとり組み始めたのは昨年、小学四年生の時から。大きな身体（現在身長166cm、体重85kg）をいかして、国技館で開催のわんぱく相撲全国大会でベスト16入りの快挙を遂げた。今年に入ってから県内の大会では連戦連勝、今年はベスト8以上を目指している。

勇樹君の相撲の強さは、身体が大きいだけではない。ミニバスケットボールに熱中しており、これで鍛えられた足腰の強さにある。

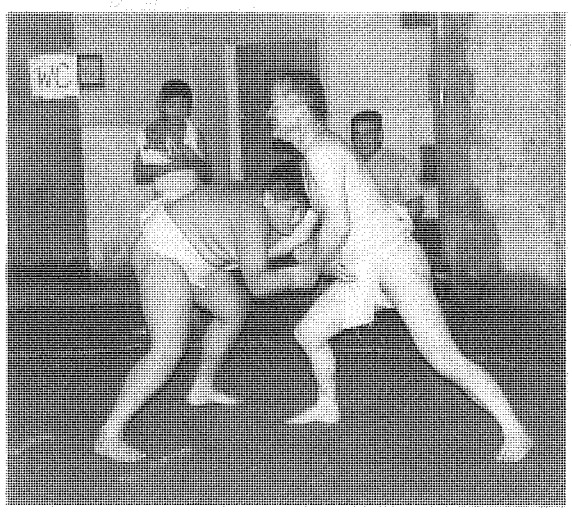
毎週火、木、日曜日がミニバスケットボールの練習、朝練習があることもしばしば。水、金、土曜日午後六時から七時半まで市民体育館のピロティで相撲の練習を継続、休む暇がない程の忙しさ。相撲の練習日は勇樹君に合わせ、ミニバスケットボールの練習のない日を選んで決めたという。

「ミニバスの方が楽しい」と話す勇樹君であるが、相撲の情熱も高まっている。特に六月十六日、片貝郵便局が元関脇の麒麟児、現・北陣親方を招いて講演会、勇樹君が親方に花束贈呈、「大相撲に入るなら是非うちの二所ノ関部屋へ」と声をかけられてからは心が揺れているらしい。一部「サラリーマンになる」と話したと伝えられているが、記者の取材に「横綱になりたい」と夢を語ってくれた。

もし勇樹君が大相撲界に入り、関取に昇進すれば、大正時代に関脇まで昇りつめた浦ノ浜以来、片貝二人目の関取となる……。

ガンバレ！勇樹君!!

（写真は猛練習中の安部君）



見事！完全優勝す

片貝中バレー部 中越大会制覇

県大会2位、北信越へ

片貝中学校バレー部（女子）が七月十二、十三の両日見附市総合体育館と見附市立南中学校で開催の、第四十一回中越地区中学校バレーボール大会兼第二十六回新潟県中学校総合体育大会バレーボール競技予選会で見事優勝、県大会（七月二十六、二十七の両日上越リージョンプラザで開催）に駒を進めた。

中越大会は四ブロック（一ブロック七チーム）に分かれ予選トーナメント戦、勝ち残った四チームで決勝リーグ戦が展開された。

片貝中は予選トーナメントは一回戦シードされ、二回戦から登場した。

2（15—12、15—3）0加茂・七谷中
2（15—5、15—5）0三条・大崎中

四強による総あたり決勝リーグ戦は

2（16—14、16—14）0南魚・湯沢中
2（15—7、15—5）0加茂・葵中
2（15—13、15—6）0長岡・南中

と五試合全てセットカウント2対0で一セットも落すことなく圧勝した。

五月の県内の強豪二十チーム選抜の「第四回春季県バレーボール長岡大会」でも優勝しており、昨年度は北信越大会まで駒を進めている実績からして、中越大会優勝は順当な結果と関係者は受けとめている。

顧問の田中和男教諭は「一戦も落とさぬように初戦から決勝戦のつもりで戦った。身長は低いが、ジャンプ力、攻撃力がありチームワークもいい。県大会でも優勝が目標」と語っていた。メンバーは次のとおり。

南雲由、吉原里恵、山口有香里、大矢有香、片桐早栄子、寺尾久美子、丸山明子、相崎千佳、山口絵里、山口梓、藤塚さやか、和田佳織、山賀千恵子、黒崎美江子。

※県大会速報

初日は十六チームが四ブロックに分かれて予選トーナメント戦。

中越水泳大会でも頑張る

安達くん 小野塚さん 県大会へ

第二十六回県中学校総合体育大会中越地区水泳大会は、十三、十四の両日長岡市営悠久山プールで開催され、安達裕介君（三年）と小野塚千晴さん（二年）の二人が入賞し、県大会（七月二十六、二十七の両日新潟市西海岸公園市営プールで開催）出場権を獲得した。

片貝中学校には水泳部がないが、二人はスイミングスクールに所属、練習を重ねていた。片貝中からはこの二人が出場し、二人共県大会出場の好結果となった。

中越大会の結果とタイムは次のとおり。

▽男子50m自由形—⑤安達裕介（25秒03）
▽同100m自由形—⑥安達裕介（1分3秒3）
▽女子50m自由形—④小野塚千晴（36秒62）

※県大会速報

県大会では健闘したが、入賞にはいたらなかった。

2（15—7、15—5）0豊栄市・木崎中
2（17—15、17—9）0西蒲・吉岡中

とまずは順調に二日目の決勝リーグ戦へと駒を進めた。

決勝リーグでは初戦まだエンジンがかからず、

1（6—15、15—11、4—15）2西蒲・分水中

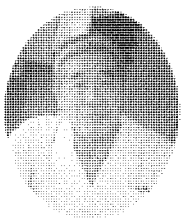
で破れた。しかし、

2（16—14、15—9、15—13）1北蒲・乙中
2（15—3、15—3）0西蒲・巻中

と連勝して準優勝に輝いた。四年連続で北信越大会（八月、八、九の両日、福井県）に駒を進めた。なお当日夕方、片貝支所前で凱旋式が行なわれた。

鈴木先生死去

生前、多方面で活躍



三之町の歯科医師・鈴木義一氏が七月十三日、入院先の小千谷総合病院で死去した。享年八十三歳。

鈴木さんは東京歯科大学卒業。昭和十年に開業、以来永年にわたり町民の〝歯の健康〟に寄与した。小千谷市北魚沼郡歯科医師会理事、新潟県歯科医師会理事などを歴任した。

本職以外でも自治体警察だった頃、片貝町公安委員長の要職を務めた。他に第三代の片貝町体育協会長、初代小中学校学校後援会会長なども歴任。趣味の釣の方では片貝鱗波会会長を永年務めた。また小千谷市選挙管理委員会委員長を務めるなど多方面で活躍した。

訂正とお詫び

七月一日号一面の片貝農協の役員人事の記事中、理事の安達栄太郎さんとあるは**安達栄次郎**さんの誤り、また監事の**佐藤裕之**さん（59、高梨）を欠落しておりました。訂正してお詫びいたします。

片貝 ヒューマンウォッチング

片貝小 井口校長は熱血漢

片貝小学校の井口勗（つとむ）校長（58）は、熱血漢であり歯に衣着せぬズバリ核心をつく発言と、温情味豊かなヒューマニティが魅力で、大勢の片貝町民に慕われている。

片貝小学校へは昭和四十八年から四年間赴任したことがあり、平成五年からの今回は二度目の赴任である。光陰矢の如し——かっての教え子達は既に社会人となり、児童の父母となっている人も大勢だ。PTA役員六十名中十名までがかっての教え子だ。

十数年ぶりの片貝赴任で一番強く感じたことは、町民の暮しぶりが豊かになったということ。その豊かさの裏返しか、親のしつけが極端に低下したと嘆く。顕著な例が「夜寝ない、朝起きない、朝食とらない、歯磨かない、顔洗わない」の〝5ない〟の子どもが増えたことだという。可愛さが甘さに変わっている、と手厳しく指摘する。前回赴任時の父母等は、それぞれの職業に対する自信と意気ごみがあった。それに較べて今の父母は……と続く。冒頭に触れた熱血漢、歯に衣着せぬ物言いの面目躍如といったところか。

かっての教え子が多いだけにPTA活動では助けられているという。中には「井口先生が校長として戻ってきたのだから、今度は恩返しを」と役員を進んで受けてくれる人も。また「今日自分があるのは井口先生のお陰。えこひいきしない先生に受けもたれ自信が持てるようになったから」。教師冥利に尽きる言葉も届いている。

片貝町については、飾る必要なく裸のつきあいが出来る土地。自分にとってはホームグラウンド的存在の町、と絶賛。ただし、伝統ある町で大人もそれを重視しているのに若者はあまり関心がないようであるが……と注文も忘れない。

教職の道を選んで一貫しているのが「人間性重視の教育」。二度目の片貝小でもそれは変わることはない。

家族は現在奥さんと二人暮し。二男一女の子供達は成人して社会人となっている。趣味はクラシック、シャンソンを中心とした音楽鑑賞、そして休日にはドライブを楽しんでいる。